災害時 必要な情報とは

関西外語専門学校

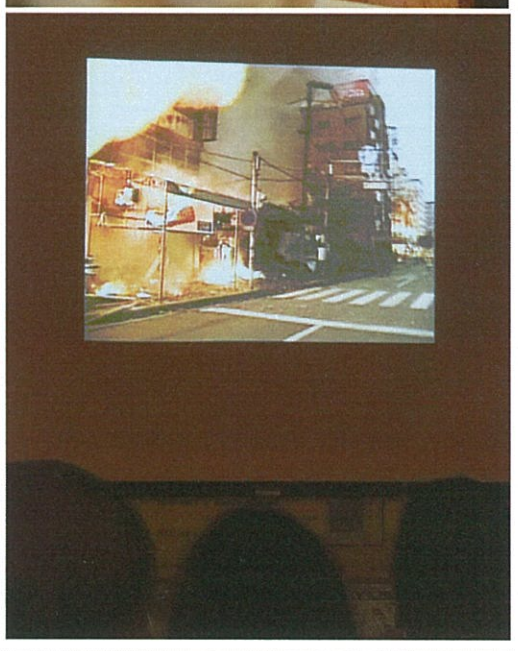
被災者を支えたのは希望

震災について学ぼうと、関西外語専門学校で学ぶ留学生ら11人が5日、神戸新聞本社を訪問した。1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の被害や新聞発行について耳を傾けた。

講師を務めたのは読者本部お客さまセンターシニアアドバイザー金居光由。震災時は写真部の若手エース記者として、被災現場を駆けまわった。

報道展示室で震災直後の映像や写真などを示しながら説明した。神戸新聞本社は全壊し、紙面制作コンピュータも使用できなくなった。震災の前年に京都新聞と結んでいた相互援助協定のおかげで、当日の夕刊から一日も休まず発行を続けた。

当初は被害の大きさを伝える紙面ばかりだった。しかし「被災者に必要な情報は何か」を考えた記者たちは希望のわく記事や避難生活情報を増やして読者を励ました。学生たちは新聞の情報が生きる力になると理解を深めた。また、防災・減災を家族で話し合い、避難経路確認や水、食料備蓄の大切さも胸に刻んだ。



編集局 ちょっと紹介

記者「七つ道具」。昔から変わらないのはノートとペン、腕章。約20年前からノートパソコンやＩＣレコーダーが加わった。レンズ交換できるカメラはデジタル化。スマートフォンは記事や写真を瞬時に送るのに不可欠。

内外勤を仕切る壁がなく、中央に通路があります。奥の映像写真部で「１面の写真差し替え」と叫べば手前の整理部や全員が情報を共有できます。

整理部の組版端末。画面で記事の状態を確認でき、見出しを作ることができます。一人では間に合わない時、別端末からも操作して助けることも可能です。

「ここはテレビ局？」と勘違いするほどビデオカメラが多い映像写真部。普通に記者が使っているデジカメでも動画は撮れますが、神戸新聞ネクストで視聴できる高品質の動画撮影には専用カメラが必要です。

神戸新聞ひとくちメモ

発行の危機 3度乗り越える

1898（明治31）年２月11日に創刊した神戸新聞。2020年12月現在、朝刊44万2365部、夕刊13万969部を発行し、兵庫県内ナンバーワンの部数です。神戸ハーバーランドの本社と姫路本社のほか、東京と大阪、東播に３支社を置き、阪神、北摂、明石、北播、淡路、丹波、但馬の7総局、20支局を設け、地域ニュースをきめ細かく報道しています。

1918（大正７）年８月12日の米騒動と45（昭和20）年３月17日の神戸大空襲、95（平成７）年１月17日の阪神・淡路大震災により３度本社を失い、新聞発行の危機にさらされました。しかし、地域の印刷所や他の新聞社の協力を得て、休刊日を除く毎日、休むことなく新聞を発行しています。

神戸ハーバーランドにある神戸新聞本社

新聞用語の基礎知識

【降版時間】昔、新聞社のビルは地下に印刷工場（輪転機）があり、上の階で新聞紙面製作（組版）の作業をしていました。でき上がれば専用エレベーターで地下に降ろしました。その作業を「降版」と呼んでいたので、今でも最終締め切りを降版時間といいます。

【ゲラ】組み上げた紙面の試し刷りのことです。語源は紀元前から19世紀まで地中海で使われていた「ガレー船」。鉛活字を並べる浅い皿を船に見立て、多くの人が詰め込まれているように見えたからです。紙面１ページ分は「大ゲラ」、記事ごとに刷ったものは「小ゲラ」と呼びます。

【カラー印刷】現在は凹凸のない刷版を使用するオフセット印刷です。カラー面には赤と青、黄色、黒の４色分の刷版が必要です。ところが４色分を同時に印刷センターに送信すると時間がかかるので、黒以外３色分を先に送信します。見出しや記事の修正をぎりぎりの時間まで行って「降版」します。

神戸新聞
2021年（令和3年）
11月5日
金曜日
発行所
神戸新聞社
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町
1－5－7
www.kobe-np.co.jp
お客さまセンター見学担当
TEL078・362・7110
神戸新聞NEXT